

目次 CONTENTS

- 2 今月の話題「エゴマがつなぐ人の縁」
- 4 特集1「わくわくをたのしもう」
- 12 飯館百景「いいたてっ子発表会・赤蜻祭」
- 14 学びの広場「新米給食」ほか
- 16 特集2「ふくしま駅伝」
- 18 ほけんとふくし「むし歯0の子表彰式」ほか
- 19 報告のページ「木質バイオマス施設」
- 20 いいたて便り
- 22 話題のパレット
- 23 そのころはっ／おすすめ図書
- 24 おしらせのページ
- 25 入札結果
- 26 いいたてDIARY／ラオス通信。
- 27 こころのぼけっと／ひとのうごき
- 28 HOPES（ホープス）

エゴマ栽培が人の縁をつなぐ

手をかけた質の高いエゴマを価値ある商品に

村ではエゴマをジュウネンと呼びます

大久保・外内地区のエゴマ栽培は、地域の皆さんが出資して今年3月に法人化した「いいたて結い農園」が行っています。村の自宅に戻った人も、避難先で暮らす人も、都合に合わせて作業に参加。学生アルバイトなども加わり取り組みを進めています。今年は昨年の約3倍にあたる3.5haで栽培しました。

秋も深まり、多くの人が集まって収穫されたエゴマ。地区内にある作業所では、水洗いをし

たり、小さな異物を根気よくピンセットで取り除いたり、丁寧な処理が続いていました。手をかけたエゴマは、そのものを袋詰めして販売する他、エゴマ油の注文生産も行います。昨年開発したエゴマの焼き菓子も道の駅などで販売しています。

「関わる人の生きがいとなるような、価値の高い商品を生み出したい」。長正増夫代表（大久保・外内）は、広がる「結い」の場をうれしそうに見つめていました。

雑草を引き抜き、余分な葉を摘む夏の日の作業。無農薬での栽培を人の手が支えます。できる人が、できる時に。



11月には連日の収穫作業。人々が協力し、工夫を重ねた方法で、小さなエゴマの実を丁寧に集めていきました。



※写真撮影のために一瞬だけマスクをはずしていただきました



松林正一さん（大久保・外内／左端）と共に収穫作業に参加していたのは、避難先の福島市で意気投合した釣り仲間。村外の皆さんも周囲に打ち解け楽しそうに作業をしていました。木製の道具は、刈り取ったエゴマを打ち付けて実を取るもので、松林さんが製作しました。皆で意見を出し合いながら、よりよい作業方法を模索しています。

今月の話題 vol.8



いいたて結い農園

大久保・外内地区の皆さんが農作物の生産・加工を行う一般社団法人「いいたて結い農園」。作業所も地区内にあり、収穫したエゴマの商品化などを進めています。



結い農園に集う人たち

ここに至る物語も含めて価値がある。よいものを生かす商品化に関わりたい

あの広い畑を無農薬で。手を惜しまない皆さんを尊敬します

お話ししながら楽しんで作業している様子が素敵だと思います

人の手をたくさんかけて仕上げたエゴマ。その分おいくくなるのですね



11月13日の作業に参加していた皆さん。左端は地域おこし協力隊の二瓶麻美さん（草野）。昨年からの取り組みに関わっています。二瓶さんの右から、佐藤優花さん、竹内くるみさん、小林彩花さんは、福島大学の農林サークル「福桃（ももたお）」に所属しています。



今月の表紙

「地図づくりの小さな旅」に出発する矢野淳さんと松本奈々さん。どんな旅だったのか、詳しくはP6とP26の関連記事をご覧ください。スマートフォンのカメラを起動し、左下のQRコードを画面に映すと、YouTubeから、動く表紙が見られます。操作に慣れない方は詳しい人にやり方を聞きながら、見てみてくださいね。

